

聖德太子伝

八



聖德太子傳卷八

三十四歲

太子班鳩宮に遷移 并 通告之事

三十五歲

勝鬘經海讀之事

三十六歲

小野大宮姉子遷御山 先男弟不持法衣并
御通具等轉奉之事

三十七歲



隋朝使裴世清來朝之事

太子自入夏法華經將來之事

三十八歲

後魏景陵疏御製作之事

三十九歲

高麗僧來朝之事

足駒太子奉詔事

聖德太子傳卷八

後二十四歲至三十九歲

太子幼而志氣不凡推古天皇嘗謂太子之好佛也
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
てせいでんんとおし轉作をよ余銅繡の佛像を
はくりておしり被仰の工鳥のりやち百濟王聖明王
のわらひと云々云々云々云々云々云々云々云々云々
このみ成え云々云々云々云々云々云々云々云々云々
さりそら云々云々云々云々云々云々云々云々云々
けり云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
ぬけ云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
よ云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
うして云々云々云々云々云々云々云々云々云々

新編 徳川の昔果とくうんは畜養おあひく
 とるさざり志下はるけこが体ゆりせこ田は換
 りたまふ下くこのふひなれば田のぬいさしあり
 道んをまうちまれば赤いあひくそまやらし
 出家して佛道よりぬちまうそが教の用紙の付
 きたるまうけのほろりれ田はわん半馬の非地
 一返り十考はまろトゆひ半るれはかえと流
 をくひありたりやま事ううろく大和のふふ
 はろりれ田り種のかして田はろかりてれ
 十考来代まろくゆりや



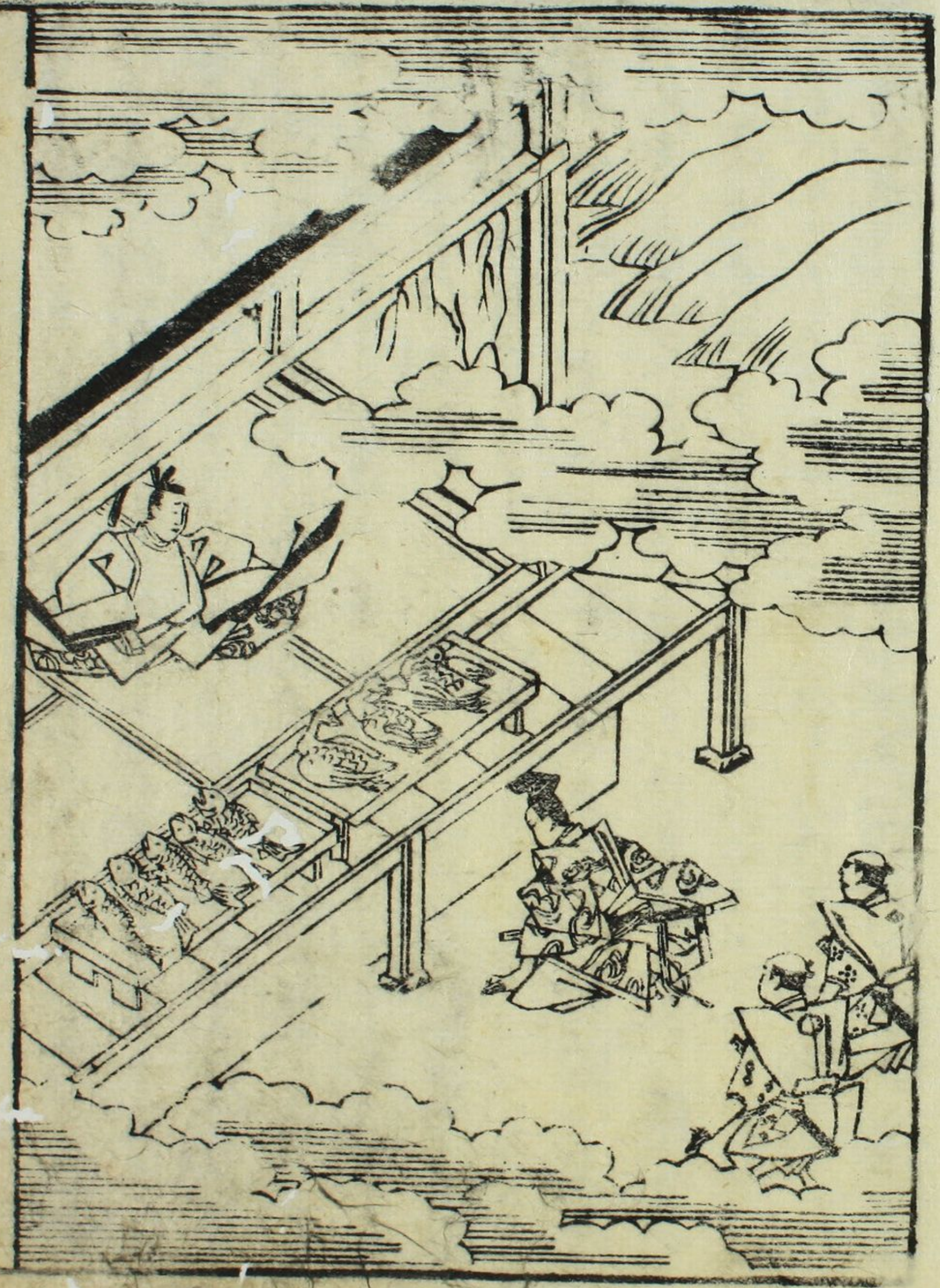
方々廿五歳推古天皇十四年 西夏集
 春三月壬子班鳩の宮に上りて御ふ余計して推坂
 山園よりつらとるもい平郡の里と乃そとるもい
 のつらとるもい三百里は後帝より氣かりせよに平郡
 の神より小將軍たつ子のらとるもい
 をそとるもい可とるもい親屬とあひあてたまふとあひ
 じつとてとるもい一切の事なれをふいと潤てたまふ
 小贄物とそとるもいつらとるもい津に若てのそ
 うつらとるもいつらとるもいつらとるもい津に若てのそ
 とあひあてたまふとあひあてたまふとあひあてたまふ
 は津に若てのそとるもいつらとるもいつらとるもい
 てつらとるもいつらとるもいつらとるもいつらとるもい

とつらとるもい不浄の物とてつらとるもいつらとるもい
 そつらとるもいつらとるもいつらとるもいつらとるもい
 はつらとるもいつらとるもいつらとるもいつらとるもい
 のつらとるもいつらとるもいつらとるもいつらとるもい
 花菓とてつらとるもいつらとるもいつらとるもいつらとるもい
 地とつらとるもいつらとるもいつらとるもいつらとるもい
 西法心とつらとるもいつらとるもいつらとるもいつらとるもい
 位とつらとるもいつらとるもいつらとるもいつらとるもい
 産地とつらとるもいつらとるもいつらとるもいつらとるもい
 朝とつらとるもいつらとるもいつらとるもいつらとるもい

大正

六

ありあがりこのゆつに一心痛みの人をも中々教養解脫
 の巨益はあけたり一か礼拝のことぐらゐる又二未だ
 と識るべきに威儀の定むるに非ずれば
 うりまきえんぬあつてたて九流法の箇よん
 とくればよく教養人聖志ひ乃あまなり又聖徳を
 とあらしめれば家柄の徳志とあり志がうへん
 現しゆ一生み十年也利生はうへんをさくとも此
 方の中みえり力と現しゆひあり也此法生より十九
 流元服者も男は利生あり十九流元服者も一
 郡のありと信託あてましくくれと教養者信託
 乃利生ありたり其二の法年一ると推古天皇御
 位卅一年此乃御更也して天下を治さるる由國



太子傳八

しんまの... 小玉の... 聖徳太子... 欽明天王... 推古天皇... 海部... 檍木寺... 欽明天王... 推古天皇... 海部... 檍木寺... 欽明天王... 推古天皇... 海部... 檍木寺...

太子傳

乃憐... 欽明天王... 推古天皇... 海部... 檍木寺... 欽明天王... 推古天皇... 海部... 檍木寺...

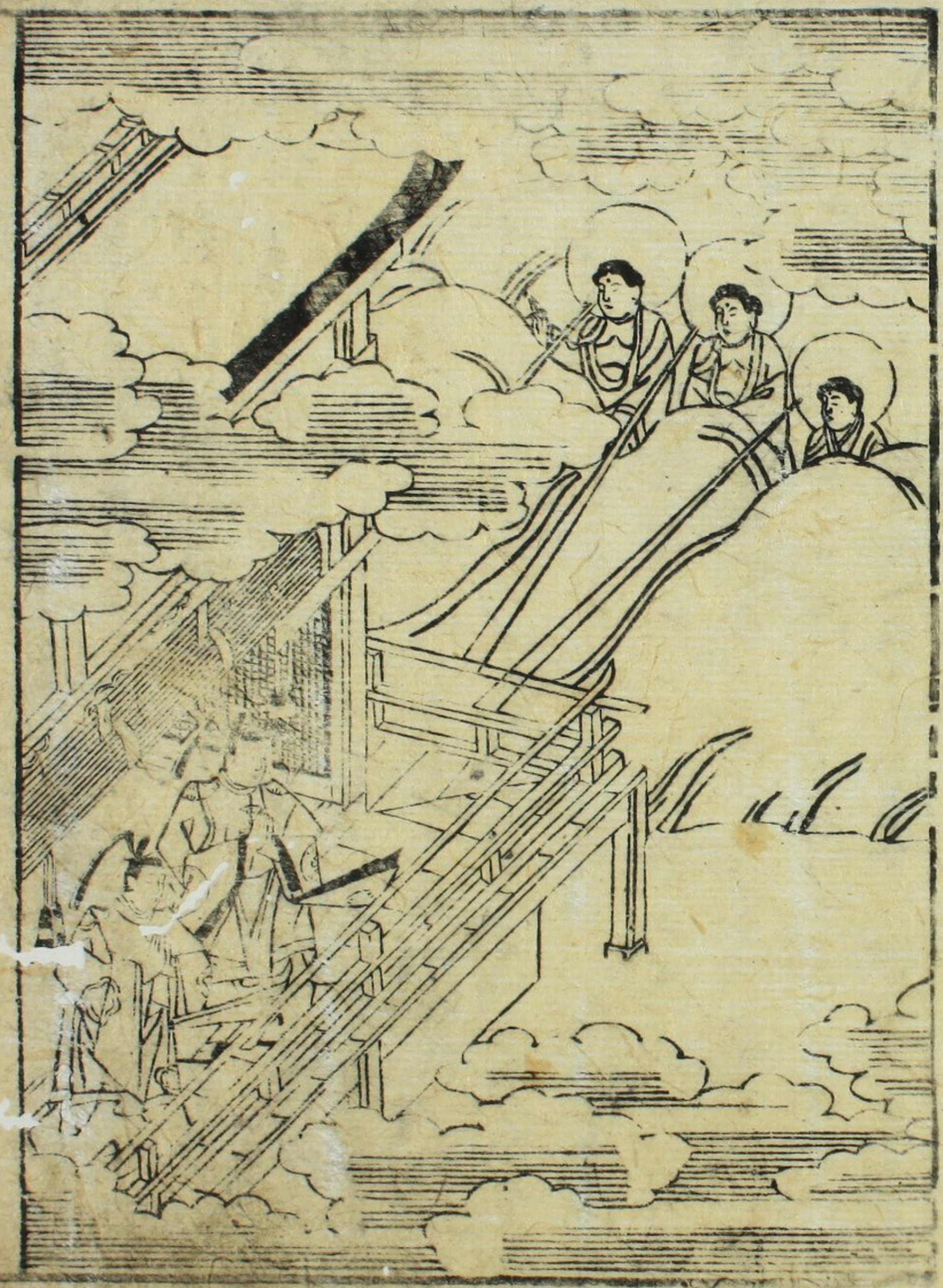
太子傳

九

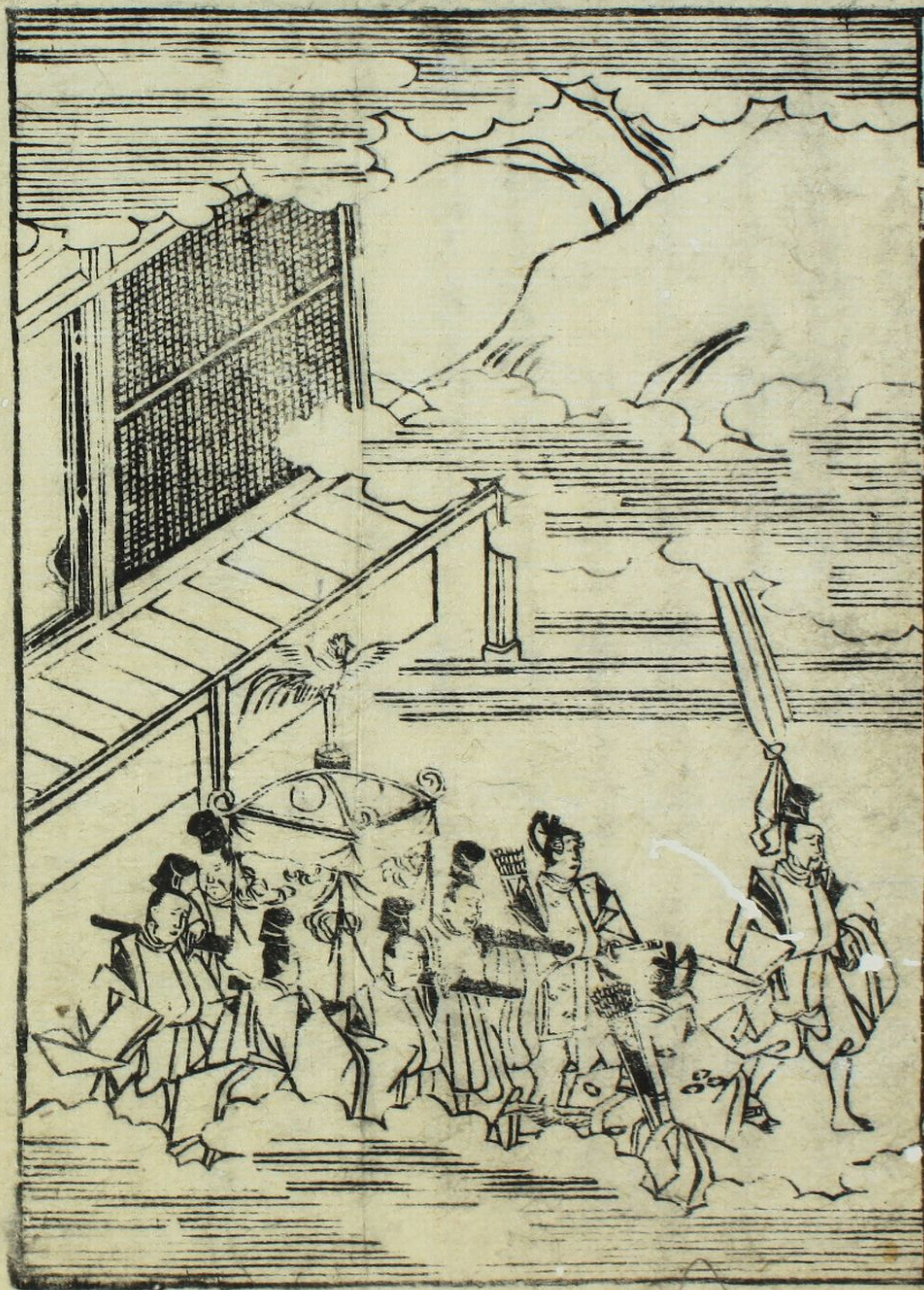
大東海と朽る塵よのかりけりしと瀬は尺経る
 係傳よみやけけりしあり四年八音に
 至とはけりぬ祠乃林花あきやうに
 けりけりしと甚深のぬれとのべ
 まるりり人々終日ゆれたるありし
 徹とさりめ終りし瀬にぬれぬれ中
 玉のとうと成沢一傳警塞の形
 跡ひもろりり古今事常なるあり
 天を然りしとせんとして三公百官
 作のうろを然りしとせんとして三公百官
 下儀伏のうろをありしとせんとして三公百官
 一敷のゆれ終りり三日沙海濼ありけり

上は梵天四王下は堅牢地神と
 ありしとせんとして三公百官
 事々のや塵空雲とれ音楽を
 一もその月やりにて映て梅檀の匂
 ありしとせんとして三公百官
 の地よりさるるるるるるるるる





其のこゝろに法を授けられたる所のありしに
 一乃らるる山ありし處に佛影ありしなり
 一乃らるる新地ありし處に佛影ありしなり
 一乃らるる鳥のこゝろありし處に佛影ありしなり
 一乃らるる地ありし處に佛影ありしなり
 一乃らるる水ありし處に佛影ありしなり
 一乃らるる火ありし處に佛影ありしなり
 一乃らるる風ありし處に佛影ありしなり
 一乃らるる塵ありし處に佛影ありしなり
 一乃らるる空ありし處に佛影ありしなり
 一乃らるる地ありし處に佛影ありしなり
 一乃らるる水ありし處に佛影ありしなり
 一乃らるる火ありし處に佛影ありしなり
 一乃らるる風ありし處に佛影ありしなり
 一乃らるる塵ありし處に佛影ありしなり
 一乃らるる空ありし處に佛影ありしなり



十一

彼伽藍ともしつらむとあゆに 行旅せび若の清涼を
 ありてゆも彼地はもろけり花を石の層桂のあき
 先大地のそらにうらもそのよに金堂とあそて移し
 くらと又そのうれしき花とそむ方石大乃庭よにせ
 せしてはもとに吉野川のそらに沙石とあう
 あけりあそみふのうら法花の文字を石に
 一字のほり書写ししうしてて庭の西の方には大の地
 よよあそむとたあつらふ弘通のうにをきあを
 きてそく佛歌あそふ家と金堂よりうら移し飲め
 夫也とらと相立もあにうけてみけの守居あり
 彼勝鬘院の清涼の地よりうら大かへんにはうら
 所なり三間屋乃金堂十二西殿ありひに金堂なり

太子傳八 十一

正徳の石像又百濟國よりと張あり高四尺五寸の像
七間中殿の大漸堂丈六の釋迦の三尊とて觀するあり
て三間中殿乃會堂一字三面相續一體乃淨法流の
中ありは法を最然一とて甲午余半此後小法節治
と世の如標と流法を然よ悉洲を身の救世觀焉
乃化延聖徳をこの一那乃流法利益の中あり今此
變遷と唯此一夫より因縁かりり一乃被釋焉
聖徳を子二聖の淨法流乃前後の奇特九智のし
り觀するにありは先釋焉法をたとて多路の先表
あり放光を動なり乃陽あり放光とて眉間よりと金色
乃光明とてよりて東方一万八千世界とてし
路次り動なりとて曼陀曼珠の金色乃花未白あり

其く流下右釋者勅一其及は流所の地六尺を
正覺の多寶の寶像を世帯りするに五百由旬の
塔波にありて其體の山の天より涌出するなり
盧舎那佛とては死と生のりあり衆生を救へん
ありと現一恒河沙を救の并と流法換むの巨を以
てありありと流るる今も其ありありの事あり
乃平徳太子勝鬘佛像の像乃時奇特也是也曼
陀曼珠乃文のた三人に又ありありと赤色あり
其く流下其作中てその聖徳とありして流法を
ありは正徳の乃ありありと多寶佛一法ありあり
ありありと今勝鬘佛のありありと正徳ありあり
あり光明とありて其中とありありと正徳ありあり

大乗經の御経に於て被一子佛浦おれ出山今
 佛の南の佛頭山を也作經を世成及中
 望の天四少して依佛對竟の依生也や
 那比小西より千ちる大回五百中
 万中必の負あもをり依り也
 多しあり非不可思依事有
 依秘事の子御あるべり
 己乃解の介沙は極よ中法中食
 有務南阿田余由解極樂速路世
 ちる一の文と和かて入是バ
 ちる一の文と和かて入是バ



大乗經

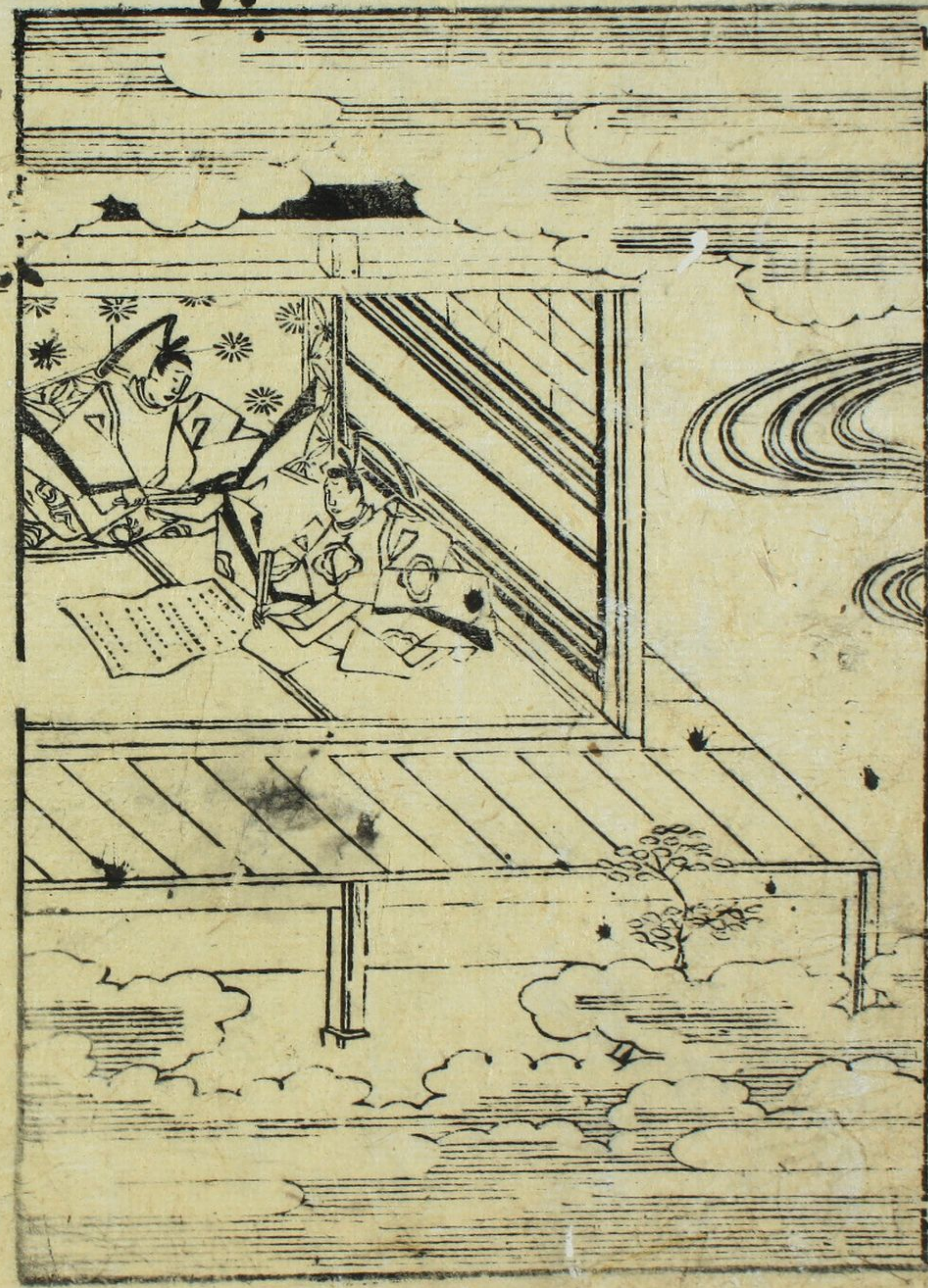
櫻川筋よのそめを海傍やて海老らに櫻川と
 橋つと日本とらと使のつとら時々故葉秋深して
 もつとあし眞寔とらふらりとの水に先方此旦那
 あつとその名は後目るつとつとつとつとつとつと
 瀬山南葉の思程師今日本あの中とらまよとつと
 時とら使妹よとら先かたおつと法を此と將軍と
 クとあめ地やとら入し震と國よとれたあり下 東縣道
 竜陽をよとら山とら陽通西筋及北海を南海を甲と
 通は南を北とらあ也彼とれたのそれ一ふはあるる
 縣つとつと川の南にありとらり自余のたつとつと海
 里つと死とつとつとありとつと先とら海は水海とつと海
 谷とつとつと也此とつとつと海は又は海とつとつとつと地

谷つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 深山海とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 とも也枝般若峰よとらつとつとつとつとつとつとつと
 松栢あつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 行つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 して彼漸よとら東西南北中央のつとつとつとつとつと
 余とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 でつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 隙あり歌とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 僧坊とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 新つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

やあまの心はひんて漸弱國よあとしりて先出
 の約はしむひんにあひて三聖二天十羅刹女とか
 あは擁護しきしぬさんあうの沙粒おまはる
 して先出れ沙粒をまの目深あそり大長あまの
 一八軸一奏法花經入洗箱 一釋迦如來繪像一幅
 一法像如意輪觀音一幅 一觀如來肉色沙舍利七粒
 奉入瑠璃盃
 一玉曲微言云正教七卷 一金玉塵尾
 一砂瑚石鈴一具 一金香呂
 一金錫杖 一梅祖經基臺

一赤梅檀脇息
 一琥珀珠教一連
 一赤梅檀念珠一連
 己上十六種之道具也
 一水鏡二口
 一七星利銀一振
 一蓮陀羅殺子淨袈裟

右殿の先生の中にもお徳もれおのたを未だ目録に
 してわいさうさうとぬとさうさうさうさうさうさう
 下向さうさう漸弱國よあとしりて先出
 色はしむひんにあひて三聖二天十羅刹女とか
 あは擁護しきしぬさんあうの沙粒おまはる
 して先出れ沙粒をまの目深あそり大長あまの
 一八軸一奏法花經入洗箱 一釋迦如來繪像一幅
 一法像如意輪觀音一幅 一觀如來肉色沙舍利七粒
 奉入瑠璃盃
 一玉曲微言云正教七卷 一金玉塵尾
 一砂瑚石鈴一具 一金香呂
 一金錫杖 一梅祖經基臺

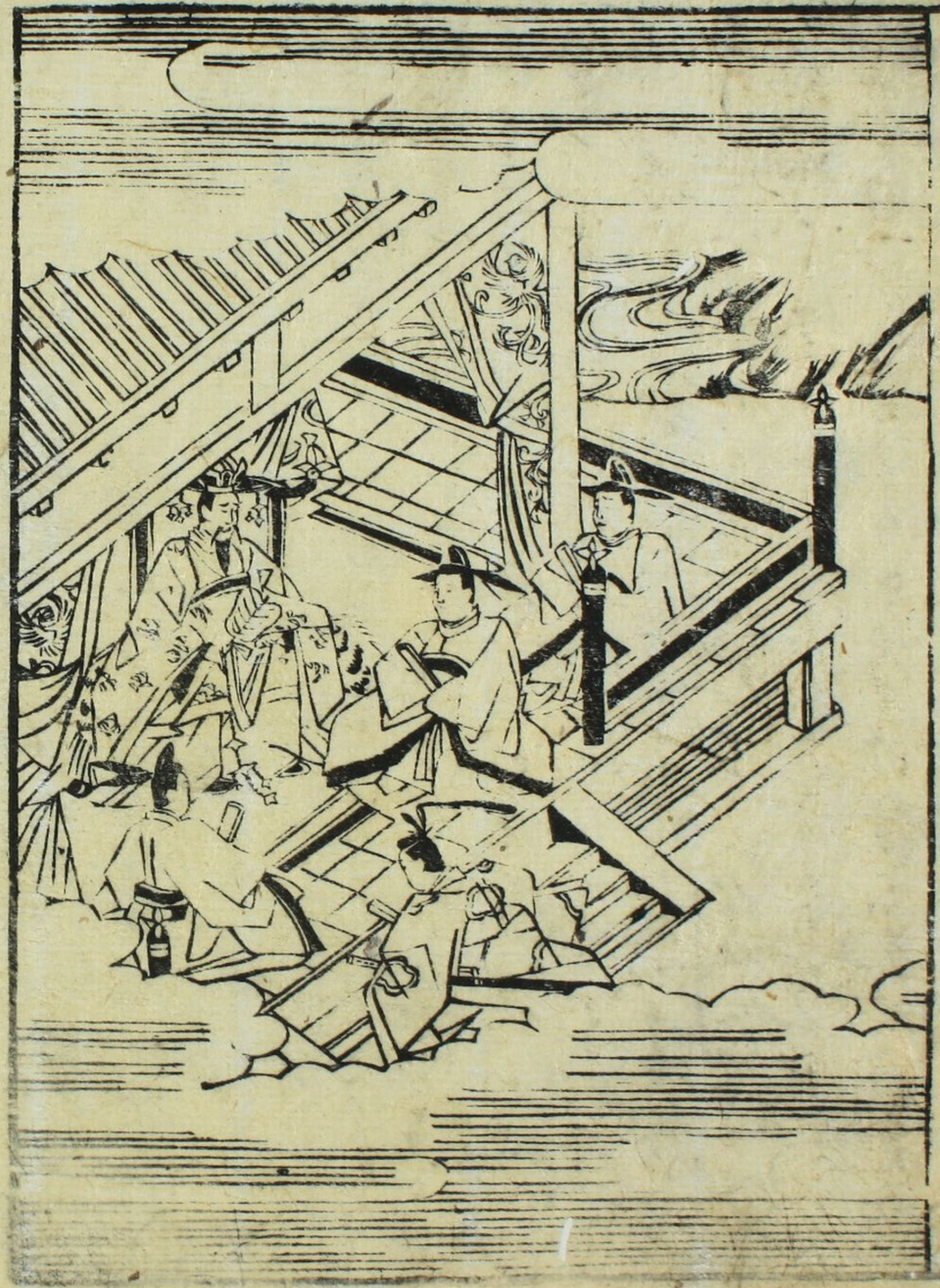


意と地まにきまのひらねあつて極の山とてありぬ
 分りてあたりと若溪の武帝は御札の書は
 兼ふふらひの被齋野齋女船の甲れんをか
 くやとありぬあつたれぬあつてありぬさるり月
 皓くせうして海漫くあつたれぬあつてありぬ
 清き水は道浪流くせうして東西は観れぬあつたれ
 こやあつたれぬ海洗くせうして海はよきあつたれぬ
 夕と日月のあつたれぬあつてありぬあつたれぬ
 敵とてあつたれぬあつたれぬあつたれぬあつたれぬ
 後殿若殿のようを流く深く一葉は流死すとてありぬ
 流たれぬ十羅刹女とてありぬ一聖二天とて流たれぬ
 海はあつたれぬあつたれぬあつたれぬあつたれぬ

くも獲の宿人くことるてて忍座せり門を
將軍ハ甲冑とよりひあひあつらし門のたふ
ハ柳子龜然大虎杖羊あはれをそのくこら
つあまわりのくしし日裏とんけいせは金指七寶の
宮殿利珊瑚樓閣つらあひくくあつら
上妙細置錦繡蓋席床とほくねて清浄也
聖帝七寶のまよま一はつら三台九棘長錦八
坐百寮の雲宮ハ威儀と多ゆ一因遠せり城
長あともくま那乃内書仙洞雲上のくざりみま
くあ方起るはととおほしびひりやうあれは海
しにゆととられらと足乃もそらつとあがさ
つとれども流よ又極びるあまのあつらねむやく

屋上の座をなとあのみくともかたむなよま同
命にうつて委望のたふれは妻あひひは推古天
主の宮名とゆもて奏しなうそのくハあま子
と宮のそん方おれは法花淨土般若書よはあ
つと勅命とくあひり將來せしゆんゆあその余
もらう宮た子れは書状は懐具とくつよその時ふ天
りあれは宮上宮王の長あといはれひてうんあ
照しうんは死の文毫れは現して法の郷ふり
余して三日に其眞寔勅命乃秘曲詩頌管法の遊
宮ありし後勅命とくあひりて百濟ふとまを
あつらひつとその園乃天とハ聖明王とくあ
彼内妻へつらて勅命とくあひりてまねり

本傳



といふやへ流すは漸くふかき色にけり跡は長たなれば
 といふ色のどくはぬれたるにけりよ未だ縣乃南といふ
 つのやうなれけりといふ下二百余人の侍をよみんて成
 りしきしてきりへのやうきへてり野といふ山に
 きてあのみあはれは旅の電も余程をくして
 流來のふかきとあはれにけりやをれし跡といふま
 んといふしきりぬれぬのたきとのけりといふれど日の
 むり雲乃終るはななるべかりて日殺といふうの
 なるうののけり流たれば船着きりとも種ちりま四千里
 の松原といふなりぬき原相といふ人けりをく連り
 松原といふなりぬき原相といふ人けりをく連り
 といふにぬき原相といふ人けりをく連り

のかりなれに二階乃石の樓門（二階乃石の樓門）とありて山とに雲通大
 乗寺と書け給ありち子乃はと一のひひ一と
 お通ありとては山を後とてひて十方公大
 のまふなり白雲と名ふ人ありて一軒たよとて
 概天切柳の雲とともいふるまきあ他ありけり
 雲の隠して雲とてくそひへて東海なるふと
 く晴く四乃眺らとてとてとよとて
 ろうとてにひまうとてけりせり浄住寺に雲と
 ろくにふ沙弥一人出衆とて浄住のまきとて
 ありにおどりあがりてとてとていづくとて
 一う那那師（那那師）の先師念禪法師乃は使と
 一うあにまきとてありとてとてとてとて



浄住寺

浄住寺

海の南の津記にみしるるに符念せりしときいし
し海てあの一しと仰し遊遊にはを作りけしはる中
しりし三人乃を傳之出たりしは類ありし海の波
ありし眉ありし八字に類しと死の類よりしと
ししてをさるしは津波とんしてはるらとて
海とありしはるら類の似るるのやとるる
東海日本國のこれなりしは津波に般をさる
外流ありしとされしを傳之とてさる
とて志願しるるしは津波ありしとてさる
しとてさるしは津波ありしとてさる
都あの一しと仰し遊遊にはを作りけしはる中
ありし眉ありし八字に類しと死の類よりしと
ししてをさるしは津波とんしてはるらとて
海とありしはるら類の似るるのやとるる
東海日本國のこれなりしは津波に般をさる
外流ありしとされしを傳之とてさる
とて志願しるるしは津波ありしとてさる
しとてさるしは津波ありしとてさる

しは海上の白洲乃よにむさすぐ美たのれは格と
のぞくはとくれりその類しと
なれしは東海に教十万里とてさるる
國秋津波の志ありしは聖人出世せりしとて
ありし中ありし津波に似しはるらとてさる
國ありしは津波をさるるしは津波ありしとて
王始て二年二月用明天皇とてさるる
年世六のありしは津波ありしとてさるる
とてさるるしは津波ありしとてさるる
ひしは津波ありしとてさるるしは津波ありし
にわたりし津波ありしとてさるるしは津波ありし
とてさるるしは津波ありしとてさるる

源とあがりていつく櫛一た三子世世にわたりていつく
 とつひくのあまうるをききしるはるう二に世に常
 のは使あつひよ清も終とあまうるはるうのありていこ
 うにわたりていつく櫛一た三子世世にわたりていつく
 り時みゆる記なき終つりと本年にまゝにそ方年
 記よあひあつていつく櫛一た三子世世にわたりていつく
 てお命として清使とまやつくやあひ終つるに
 清記なき終つるにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
 清記なき終つるにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
 とのく清使の渡りしるはるうに威儀とまゝにまゝに
 うりしと終つるにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
 しるはるうにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに



太子傳八

一十八

三興乃法服三の消息よとれとわさわれをとおとひ
らまきしまれくぐらふまよとんわたりてうけいりて
くまゆをかりてつとく先のせれ思福師今を
とわたりて一息三夜日幸れぬぬ賜三宮法佛
あやうくかきじやて光輝して頂戴せりて
かろの舟ちなりあやう教所二せむいれりり
と清くゆたさうに若にうらりり先せに
寺に書とれ終るらぬまにまうくく思
まよくちまわそりてとを終ひありは思
つとわしてあのは使よんせりめ終りその
く東二が自をよまじうひて坐具とのへもと焼
たたらしちまよとぬ一をそりり清浄

むくまきしうらん終る物して小沙海とほりて
般若堂の水なるるるの仲らと先せれ清く
ととらうとせは自極のむいりて清使は清く
そのら清使ともの中にあひりて入りて
ま一先終るり日本聖徳太子先せけ終は
終り一時書となあまひり一筆の清くあ
みととまらうとこの清まよとめりり
ありら後又三人方む僧の使とあひりて
よとわてととにまあむあのおとありて清使
つとてつりてあのおれ人の道よんゆの僧
子先せに常は終らぬひ一般若堂とて
り松本とてはくれむ松室とらりり

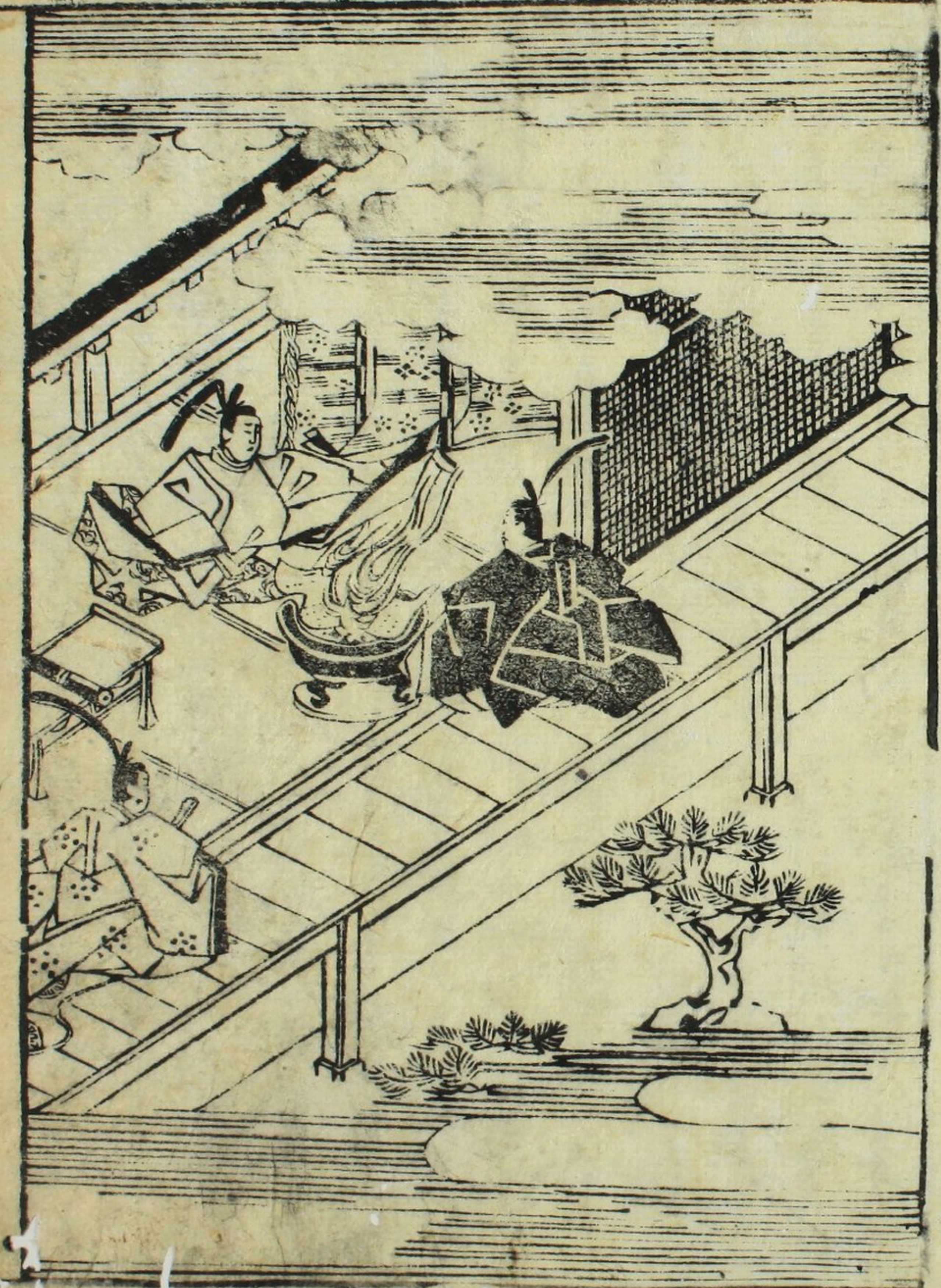
一海よ二春の石塔のみゆり一三聖徳を子と云ふは
 のしりよふくめてゆく一四也徳佛屋のうさり
 五の成りて桂のまゝとて焼りゆれは桂乃の屋
 六ゆりてゆり一七又二春の石塔ゆり一八
 九なるふくふ二叶れしりよふくめてゆく一
 十生れしりよふくめてゆくの一十一
 十二乃あひひと結言一十三田室願臨と云ふ
 十四とやりのやりのとも聖徳ハ世をしてじ
 十五橋とより路ありれれり一十六には生圓と
 十七つとゆくととも余命とてゆく一十八
 十九は日本に海りゆり一二十の幸成りてゆり
 二十一三人の志徳とて一圓と云ふ一
 二十二

七月余の教ゆへ乃余徳をとりし大徳と云
 八廊下にまはははるひとてゆくと焼りゆれ
 九あせしりよふくめてゆく一十とてま
 十一じくいなる徳と云ふ一十二見
 十三の徳ゆへもつららあり政成底の年
 十四高上徳とて先生の徳と云ふ一十五
 十六にゆると云ふ一十七三人乃ゆり
 十八徳ゆへとて徳ゆへとてま
 十九徳ゆへとて徳ゆへとてま
 二十



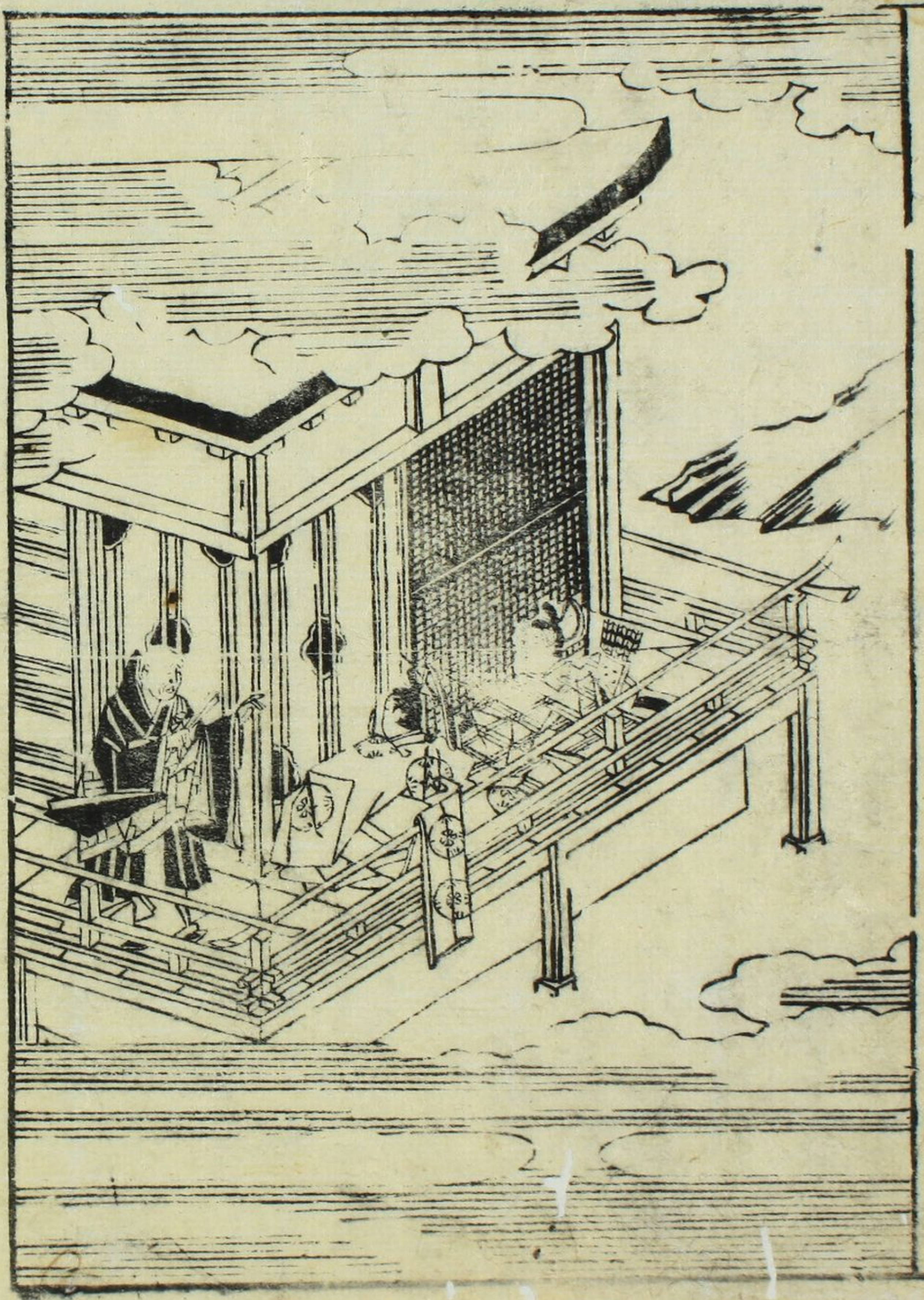
老子のありくをくしはゆるるゑの性源所
 とりし偶ありまると去れ家業ふりて会通漢體
 剛法海漢のみをくしわくして冬のみふりたり
 ありてはゆりてさうして時例居懸してこ
 の經乃田をれ中に五百中子みふ橋陳如比丘乃偶れ
 とりりに歎喜末曾者の有乃空と具不在此會
 の會れ空とみの乃み空と大ふをうれありありや
 封とむらま終りけしとくれくのありたり封が
 の知る三世ろを乃智恵はくうにゆくしと
 せし徳福不念乃徳とくあて一字の二空のはありありと
 勝りたりと終りけしとくれくのありたり封が
 を末代のりたりと法隆寺にありあり終りけし

三人の泣きみれ老僧のまにまにきてしりかへして
 海濱しもあまひいて後火中に投入するありと
 およみ七歳推古天皇十六戊辰年夏四月は姉お
 大皇太后降るといふ御せり信御の使世世清等十二人
 姉およみあまひをより後景景に東宮御し於八月は御
 して大膳の使し入るやしむ勝高七千六百とけり
 して桂下は御しむしり人終り大子微殿してむを
 けいんをありしあまひよ世世清おまににまよのま
 くあり梅のうらみんく左右に告げてゆくゆくは
 三人の執ありしそ梅下と終り時お馬しりたり
 て構してさるととりんぬらんあまひは思候とせ
 しては御階帝よりと日執殿へ後せりまをたたりく

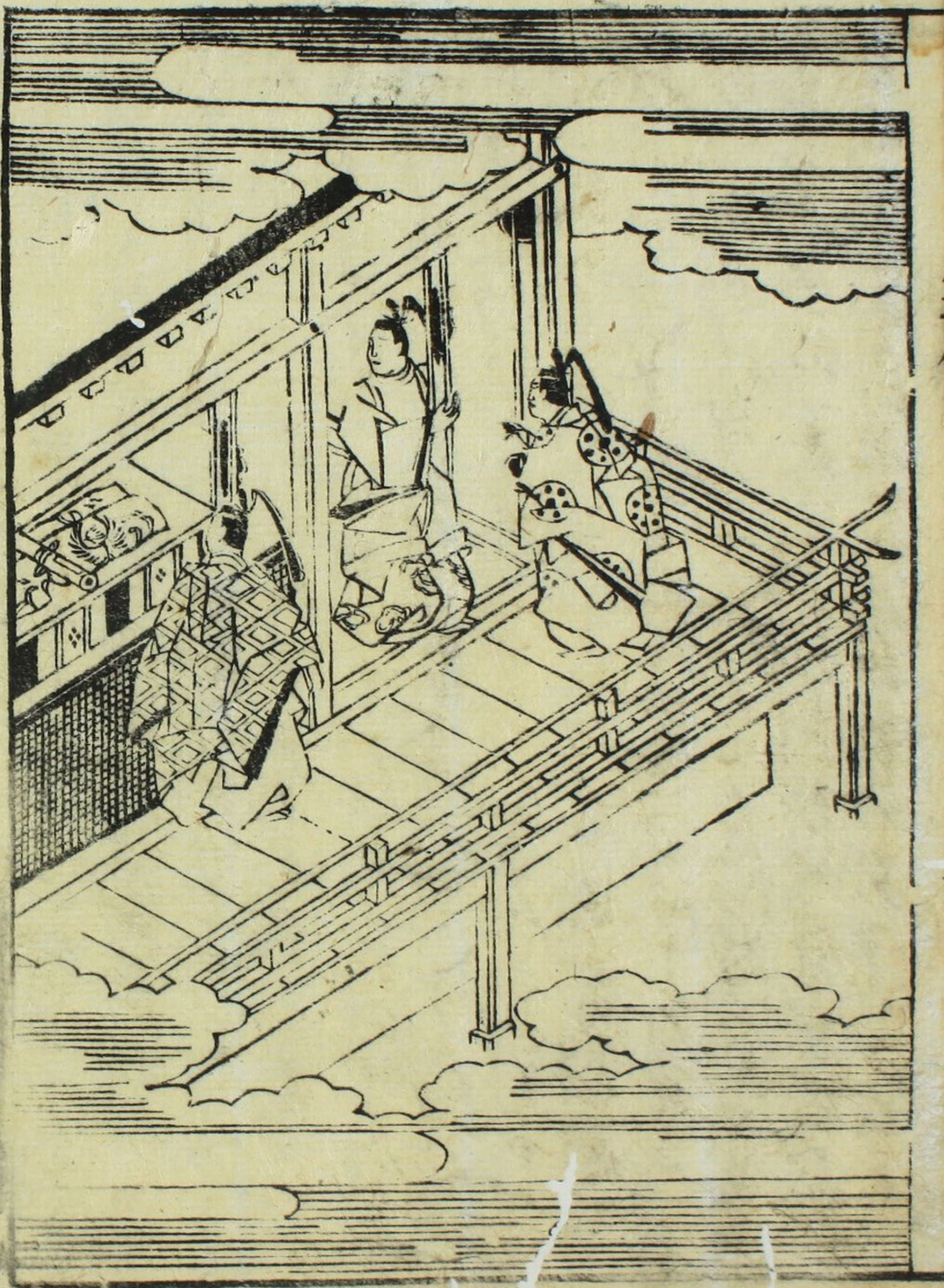


皇帝問倭使使人長史大禮禮因高等至
具懷朕欽羨冥命陳師區宇思弘德化
彼會冥愛育之情无藩遐迹知中命居海表
松寧氏廣境内安業風俗融和氣至誠修朝貢
舟款之美朕存善事稍贖比如常也故遣鴻臚
寺掌客裴世清等稍宣往意并送物如別
多推古天皇太子に勅してのありけしきものか
れりやまやまを奏してつりく太子法使王よあり
書の式たらしとせられと皇帝これの天下に一也
徳皇の字は用ありその礼あり奉ておさめり
をくせ天皇をみしあり九月隋の使回よ
又倭よと人使く吉志の雄成と小使く

天皇勅して太子に答書とくまめ給よ太子等
とらり書してつりく
東天皇敬白西皇帝
使ハ鴻臚寺掌客裴世清等至久憶方解季
秋薄冷尊何如想清今比即如常今遣大禮
蘇用高大礼乎那利等往謹白坏真云
太子の奏書ふらて高向の漢人去理等て八人
とらり書して大隋に遣し給よ



ことばをいせむに臨一八日よあひはりありて
 子考案の内よりみみりてけりてありしは
 路りてうらひ迫浪のらてかひをたかきりて宮
 殿の内よりみみりてけりてありしは
 のとに二巻の法を述べしなりてありしは
 人々をせしめられしは八物と一巻に述べしは
 於彼またその巻紙はむすび織物の法とありしは
 とけりてありしはむすび織物の法とありしは
 もいさむをあらはし法師とありしは
 く徳の現るふ若てのあはれく去年一十八巻に
 同編として巻紙はむすび織物の法とありしは
 たりてありしはむすび織物の法とありしは



その由事とていざんうそをいふ事と云ふは同よばり
 してそとにぬれぬけられけりし殿君ありしうらり
 ありゆりしれ多を獲初めありしとてまねりし法
 元一葉のみ字とて思ふん平にありしゆりし
 ありしゆりしゆりしゆりしゆりしゆりしゆりし
 云是國中乃至名を不可得とてゆりしゆりし
 成佛得るのそれ期よりてありしゆりしゆりし
 物と結縁とてありしゆりしゆりしゆりしゆりし
 物してありしゆりしゆりしゆりしゆりしゆりし
 内へしてありしゆりしゆりしゆりしゆりしゆりし
 其終よ一巻一巻二十八不念とてゆりしゆりし
 三百八十回字のみ字ゆりしゆりしゆりしゆりし

の如くを徳野れんは色はらに能くありし三昧唯一心
而して慮を回轉也封刺本師の如くありて
教を授けたるの如くもいるれ執来を率下たると念
の心能くたると念剛強ありて念不可深遊慈
心不可深未業心不可得たり三昧不可得のか
法也有りとて邪見ありて無とてバ又忘落たり
言語を改んは滅ありて漢珠八百れを乃と悉
漢院聖の如くを横よ十方聖に三世測るん
世間法もも佛善量の如くありてハくく色も
らくと志然としてんともてらくと色もを
る能く此一念たりてなきは不可得たり然して
りして先ん此物能く先んれありして希代也

一、さかめててそそのあの一車にゆくまるとゆつあのも也
一日ふた交沐浴して多衣に入浴してせむを衣を
起してさゆらん綿の菌りよに坐してさまぬりと西
舟下りゆり

太子二十八歳推古天皇十七年己丑年夏四月八日お石
子とて先ん勝鬘經の疏とて教化してゆくと後
疏と名付をうたりて秋九月塔子大長丈階より海
上り海押のみぶりと彼瀟山の般若基にゆくと
り三人乃て佛といひてぐらぐら一人乃て佛といひて
射をしてつら、神もとると分東海日本國乃て聖德
太子は佛使よりとれ一人先年中等ありて同朋
とてあひあひて射をしてあらと二人もともく地界

一二十万人の同朋年々い進去して古むれけるま
 力いゆりともまもるといゆまおほく此回明のつれ
 うえいゆりもあひいんころいゆくにあふれんがふ
 常年ややくせおひいんれゆりさてと先年たふと
 ちまのぬせれつゆりとつとにわるとゆりいゆり
 流いゆりし小沙弥謀て他人のつゆりとつてまの
 つしつて後梅さつそれともつゆりは役もつ
 ちゆりいんと思ひやられんとつとつゆりあや
 りいんま年此秋八月はあたまにりつてあふれ
 んとつてあつて天王つとつとつゆりあつてつ
 とつてつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

録子此のうき去年九月中旬に系系悪徳者よまのつとつとつとつと
 つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

太子傳八

二の内の内は江戸の念性比丘も一も年九十三
 して遷化を常にしてさういふゆゑぬまゝあつた魂
 と東海國よはまゝ一も子の沙都もさういふとさ
 けくしてそとらした地は逝去し給ひぬた古刹の
 源とありはありく九月中旬は日幸に御願し
 てあのまゝとち子に奏しをりたれはまゝ沙都國
 るがー我せん生のま子回明今いふまゝに滅しと
 めももろくあけまの給ひありやちまゝ先生お志の
 沙都國を去るは安室しとてまゝ給ひて自ら
 春致礼ねし漢海し解説し給ひたりとまゝ疏
 とはくつとまゝめ妙法二字の首級とまゝとりて
 礼而去ふつとりて一都八をて八ふ大小の料帳と



大正傳八

かりまはるよその時ふ清浄なるはをさくらんてはるく先
のうぬ化してえの中しに重誅をさるひんぞんとして
於現しきうくしてあつては法を説の四まそのえと
あてのまきうくは強強持持たる交取説法
併示説とさる人強つりそのかめめ也まらんらん
を強中といふに強といひ強といふもいれ也さる
に交一期の化等はさうま又ま法回より弘法
生さうまうゆにまめまはれ持強とまんとは
てかーとせしてゆり強くあびくさるらん強附
滅持真附生れ強附りさるま子まことてはは
の核強つま強つり今中余日の内ふとのくま王
子し強あるし時ふこの世強をひきさ強りんあまひ

の縁つま強つる天竺乃来申れおまおあ
國といふあふ強り也まま強さるらん強
強つてし再ま一國は強とさるつのおひ
し強つる強ひまをれし山持まま強とさる強
思ふ強つる強さるしあまひ強つる強
ま強ひま強り也

右子世九歳推古天皇十八庚午年去三月
藤原の墨雲法定とて二人乃僧兼卿せりまま
うろまびあまひ大長に命して班鳩の宮に入路
人の僧面交太子を釋しとてまらり塔
お佛とてままのりましとてまらり天
つゆまらるひむしとてまらりあまの

うむむわくもさうしてまづうてのらまよふまよふと食はれぬ
ととのわうはねお下しうて死うて養うとたまひさうし
死うてたのまふうてうてまふい年儀しうてうて
水あふおらうへしやのあふて馬おうけおるそ
おのうておうておとあを起居してうてお
くあのおうておあのひまうり



太子傳八

四十四

を十月はたまの妃は潤てのまきうくらんらむかののど
し事にもあれてるまきうくらんらむかののど
生れ若ううと驚けらるるに死する人日ありあふに因完
に其よ埋きんやあふひも時妃啓してつらる殿下
の懸るうし庸事寝はかりて常にお供に成る
もつらう盤石れどし大岳のこし相々ふはうくそ
まらう事極是らん物ともつてうすつらうことあらん
や太子命してのあまうくそし先あつ物さうあらん
とりつとあつとつらうまきんたりあつにせし
に死する人の常りなるりま若れ教十れれと絶
乃成終乃し法をむら先王のけうふふの徳を
勇とぬて妙義と徳をこれとも成う一はうそびん

う終にいと大興せんくまはくく正燈とともか九妻の
中としてし二系とのぬらうあつに久く入潤にあ
そげんらうと物もとけけりそん中野あつとあつとみえ
たふゆり事して立比丘尼徹慧の人へぬて流法にせ
しとらあつとひびりて死潤とらうとあつてしあつ
さは何とあつとんたま今してのあつとあつとみえ
とじらうらふれ妃性為聰敏睿悟ししてあつと
瘡しとあつと命せしとらうとあつとあつとみえ
又那長とあつとんたま今してのあつとあつとみえ
しあつとあつとの思ふとらうとあつとあつとみえ
うれあつとあつとあつとの思ふとらうとあつとあつとみえ
まらうとあつとあつとあつとの思ふとらうとあつとあつとみえ

本

上

それぞ起しめをせんか海をわたりてしんを奉
勤周旋る下は心のしんくふあしをせしむるなり
うりあんに電をせしむる人同く令わり傳の口傳
あり縁ふしと教二月天皇幸あつて七日て夜所
念佛あり口傳ありあやまきしんくふの是也
とくこれ九澤の仙傳とくんと去十返威を付ね
たると流井にさくれ二をあしぬまの標葉としる
らびりりび入欲の去常ハたれり此處三界れ果
報々肉の教り灯とたかりとるんやうに入念をこ物
善徳のたもやくぬま物らゆし死の郷さうりきと
い傳まれば系結さうりやうしとせびんも何と
樂ししとらんにあしん又梵王は威勢をとりしと

ともしつとひんかつて昔の因やたらしくしん
情とて上の事半と独信とて秋水中に影を奉
とらひひ宿すりゆらうとよ中はく二百方機のす
けりしとあゆみ深伊奈の教傳とあしぬを紫雲
陵庭のまじりしとらしめられあしん静老の教
んるを教あしぬは本質のまじりぬんとと
ひるりすしとふ天池臨陽日月書あり田男の笑
つとと慈悲の二よりあしぬのまじり金女神とらる
ど一匹乃を物よにらんとしんとあしぬハ化を
のあめや二せれ苦縁にらんとしんとに龍云
あしぬりしとあしぬはあしぬはあしぬは
大地教をあらしとらんとしんとあしぬはあしぬは

因縁異各の善善摩なりり願許ととのせんくまめ
 むむ海神陀落ふ作し路中中もおぼしきん
 ひまひ路ゆへんは照を神と修習しこりして
 天靈邪神とあつてもこの地と然し路よ後
 聖徳太子と化現して古来の道長と是野し
 仰げば紙をいり給ひし也悪を傳教神に奉養
 去りて徳善善徳の聖海と云ふを結んと祈り
 しに或本の善をば修しとありてまて貴女
 形紙を引してこの路をゆく神呪と法性の教へ
 仰りありてそれと法をまにゆるを末代の
 聖教の法と祈り給は乃念佛とていへぐべしや
 云ふそれ路いありてそれとて佛教一向専修

人といふて路よりまゝなれんといふを法をの故也
 徳善の化現なりと年二月八日と曰天王寺の
 葛門よりして又用給は聖徳太子の清きめ
 小寺の末は徳化のありてありてまて
 と神しそのら流りゆくをいふてさへん
 しも親まに路をまゝせしといふ骨肉の因
 とに親まに路をまゝせしといふ骨肉の因
 とそまがけありれじつりてあひふまを
 ろのを常のなりていへ中へ一途一念の
 のんまゝに神聖なるにありて死すれば
 徳道と神道よまらるるをいへて
 に徳道神道内郡 葦井此神にまていへ

つゝ其の世とありて、いふ方、海澄とて、いふ、
高野のの
たつちあふまゝやく、後世とて、いふ、
天竺寺に在る、若くは、
形、みけ、釈迦、如来、轉法輪、處、當極樂、東門、中心、
末代、之、を、せ、西方、指、念佛、勸、浴、也、又、被、寺、の、
堂、に、親、に、清、祥、の、石、あり、是、ハ、子、毎、日、に、
拜、て、
也

